

青年海外親善使節団
姉妹都市親善留学生
報告書



財団
法人

Takamatsu International Association

高松市国際交流協会

目 次

高松市の国際化に向けて	理事長 三野 博	1
I 青年海外親善使節団の報告		
○ 団員名簿		5
○ 日 程		6
○ 活動の概要		7
○ 団員の報告		
訪中を顧みて	団 長 森 茂幸	10
親善使節団に参加してー中国で感じたことー	宇都宮善之	12
青年たちの文化・思想について	川畑 宏之	14
錆色の広野は温かかった	黒川 寛子	16
中国に、出会ったすべての人達に干杯!!	東条 步	18
青年海外親善使節団に参加して	中村有木子	20
青年海外親善使節団に参加して	水沢阿由子	22
中国を訪れて	事務局 井上 哲	24
○ 南昌市の記事等		26
II 姉妹都市親善留学生の報告		
○ 留学生名簿		31
○ セント・ピーターズバーグ市親善留学		
日程および活動の概要		32
アメリカに行って	菊池美由紀	34
○ トゥール市親善留学		
日程および活動の概要		36
トゥールの思い出	笠居佐都美	38

高松市の国際化に向けて

財団法人高松市国際交流協会

理事長 三野 博

近年、我が国においては、1年間の海外渡航者数が1千万人を超え、また外国人の入国者数も約300万人に達しており、市民の皆さんが外国の方々とは接する機会も一段と増えています。地域の国際化が叫ばれる所以です。

外国との交流は、これまで国の外交や企業活動などによるものが主となっていましたが、都市の国際化を図るには、これに加え、一人ひとりの市民による市民外交の推進も重要な課題だと言われるようになってきております。

財団法人高松市国際交流協会は、高松における地域に根ざした市民レベルの国際交流を進めることを趣旨として、1990年8月に設立され、さまざまな国際交流事業を実施しておりますが、このたび海外派遣研修として、豊かな国際感覚のかん養を図り、高松市の国際交流の推進に寄与することを目的に、青年海外親善使節団を中国へ、姉妹都市親善留学生をアメリカのセント・ピーターズバーグ市とフランスのトゥール市へ派遣しました。使節団、留学生ともに現地において温かい歓迎を受け、市民等との親善交流や視察見学などを通じて、訪問国への理解を深め、また国際交流の重要性を再認識するとともに、各都市との友好親善に大きな成果をあげることができたものと思います。

今回の派遣を通じて結ばれた現地の市民等との友好関係を今後ますます発展させるとともに、派遣期間中に得た貴重な経験を高松市の国際交流の推進に役立てていただきますことを希望してやみません。

最後に、青年海外親善使節団派遣事業および姉妹都市親善留学生派遣事業の実施に際し、格別の御協力を賜りました高松市および姉妹・友好都市の市長をはじめ国際交流関係者、訪問国の受入先でありました中国日本友好協会、E L S セント・ピーターズバーグ校、トゥーレーヌ語学学院、その他多くの関係者の皆様に対しまして、深く感謝を申し上げます。

I. 青年海外親善使節団の報告

○ 青年海外親善使節団団員名簿

(団員50音順)

役職	氏名	性別	年齢	住所	勤務先等
団長	モリ森 シゲ茂 ユキ幸	男	36	高松市茜町28-18	(社)高松青年会議所理事長
団員	ウツノミヤ宇都宮 ヨシ善 ユキ之	男	26	高松市鶴市町1418 四電工香東寮	(株)四電工
〃	カワ川 バク畑 ヒロ宏 ユキ之	男	25	綾歌郡綾南町大字北1354-5	(財)四国電気保安協会
〃	クロ川 ヒロ寛 ヨ子	女	24	木田郡三木町田中92-5	大阪マリア(株)四国営業所
〃	トウ東 ジョウ条 アユミ歩	女	25	高松市香西北町112-3	(株)INAX高松支店
〃	ナカ中 ムラ村 ユキヨ有木子	女	23	高松市川部町1403-4	(株)南海
〃	ミズ水 サラ沢 アユコ阿由子	女	25	高松市浜ノ町60-55-217	自営(アナウンサー)
事務局	イ井 ウエ上 テツ哲	男	40	高松市番町三丁目17-6	(財)高松市国際交流協会



○ 日 程

日次	月日(曜)	地名	現地時間	交通機関	日 程
1	3月30日(土)	大阪 発 北京 着	10:10 13:00	JAL785	中国日本友好協会招宴 (北京飯店泊)
2	3月31日(日)	北 京			北京視察見学 (北京飯店泊)
3	4月1日(月)	北 京			中華全国青年連合会表敬訪問 北京視察見学 中国日本友好協会表敬訪問 高松市答礼宴 (北京飯店泊)
4	4月2日(火)	北 京 北京 発 南昌 着	14:45 17:05	CA1511	北京視察見学 (江西賓館泊)
5	4月3日(水)	南 昌			南昌市人民政府、人民对外友好協会表敬訪問 南昌視察見学 南昌市人民对外友好協会招宴 (江西賓館泊)
6	4月4日(木)	南 昌			南昌視察見学 南昌市青年連合会表敬訪問 (江西賓館泊)
7	4月5日(金)	南 昌 南昌 発 上海 着	22:25 23:30	MU5506	南昌視察見学 高松市答礼宴 (上海賓館泊)
8	4月6日(土)	上 海			居民住宅訪問 上海視察見学 上海市人民对外友好協会送別宴 (上海賓館泊)
9	4月7日(日)	上海 発 大阪 着	11:15 13:55	CA921	

○ 活動の概要

3月30日（土）

- 大阪空港から北京へ向けて出発
- 北京空港着
 - ・中国日本友好協会の李鉄民副秘書長、張利利都市交流部副部長ほか関係者の温かい歓迎を受ける。
- 天安門広場見学
- 中国日本友好協会の招宴
 - ・王效賢副会長の歓迎のあいさつの後、本場の中国料理で歓待を受ける。



中国日本友好協会のみなさんと

3月31日（日）

- 明の十三陵・万里の長城・北京動物園等視察見学
 - ・中国日本友好協会の張利利さん、關湧さん、李勁松さんの案内で、中国の歴史を語る史跡などを視察見学。

4月1日（月）

- 中華全国青年連合会表敬訪問
 - ・王勝洪副秘書長から、中華全国青年連合会の活動内容の紹介を受け、意見交換を行う。
- 天壇公園・故宮博物院視察見学
- 中国日本友好協会表敬訪問
 - ・孫平化会長と会見し、高松市長からのメッセージを伝達した後、中日の友好交流の歩みや今後の交流についての考え方などを聞く。
- 高松市の答礼宴
 - ・森団長のお礼のことば、吳瑞鈞副秘書長のあいさつの後、広東料理を囲み、歓談・交流を深める。

4月2日(火)

- 北京体育学院視察見学
 - ・スポーツの人材育成についての話を聞き、体育館、プールなど主要な施設を視察見学。
- 北京を出発し、南昌に到着
 - ・張利利さんの同行のもと、北京空港を出発。
 - ・南昌空港で南昌市人民政府の李芸主任、南昌市青年連合会の呉治云首席ほか関係者の温かい歓迎を受ける。

4月3日(水)

- 南昌市人民政府・南昌市人民対外友好協会表敬訪問
 - ・蔣仲平市長、徐月良人民対外友好協会副会長を表敬訪問し、森団長から、高松市長のメッセージを伝達する。



南昌市人民政府接待庁にて

- 滕王閣・八一起義記念館視察見学
 - ・滕王閣は江南三大建築物の一つ。八一起義記念館は、人民解放軍の南昌での武装蜂起を記念するもの。
- 南昌市人民対外友好協会の招宴
 - ・蔣市長、徐副会長の出席のもと、盛大なもてなしを受ける。
- 製茶工場視察見学
 - ・工場見学の後、工場の青年達と交流する。
- 順外村訪問
 - ・農村開発モデル地区の順外村を訪問し、村の紹介を受けた後、青年達と意見交換を行う。夜も、交歓会で引き続き交流する。

4月4日(木)

- 南昌第二中学訪問
 - ・生徒や学校関係者と交流。訪問記念に、団員全員が書道に挑戦する。
- 江西省博物館視察見学
- 南昌市青年連合会表敬訪問
 - ・呉治云首席の歓迎のあいさつ、青年連合会の活動内容の紹介の後、相互に質疑応答を行い、交流する。
- 少年宮訪問
 - ・児童の訓練センターである少年宮を訪問し、子供達のかわいい演技披露や団員の日本の歌の合唱などにより交流を行う。
- 南昌市青年連合会と交歓会

4月5日（金）

- エンジン工場視察見学
 - ・工場内の見学や工場の青年達との意見交換を行う。
- 高松市答礼宴
 - ・森団長のお礼のことば、徐月良副会長のあいさつの後、歌などを交えながら、歓談し、交流を深める。
- 八大山人記念館、人民公園視察見学
- 南昌を出発し、上海に到着
 - ・友好都市南昌に別れを告げ、上海へ。飛行機の大幅な遅延により、上海到着が深夜になったが、上海空港で上海市人民対外友好協会の方々の出迎えを受ける。

4月6日（土）

- 居民住宅訪問
 - ・上海の一般市民の住宅を訪問し、生活ぶりを見聞きする。また、その地区の幼稚園を訪問し、園児の歓迎を受ける。
- 玉仏寺視察見学
- 上海市人民対外友好協会送別宴
 - ・鄭玉在常務理事に、高松市長からのメッセージを森団長が伝達した後、鄭常務理事を囲み、歓談・交流を深めた。

4月7日（日）

- 上海空港発
 - ・中国との別れを惜しみつつ、上海空港から一路大阪へ。
- 大阪空港に無事帰国

訪中を顧みて

団長 森 茂 幸

我々高松市青年海外親善使節団8名は、3月30日から4月7日までの9日間、中国の北京、南昌、上海の3都市で、有意義な国際交流を行ってまいりました。

団員の青年達は、いろいろな交流の場で、政治、経済、文化、市民生活などについて意欲的な質問を投げ掛け、また、質問に答えるなど、自分自身が高松市の青年の代表であるということを十分認識した上での発言、応答が行われました。

まず、北京での中国日本友好協会の孫平化会長との会見では、これからの中国と日本の青年の役割についての話が行われました。その中で、孫平化会長は、「中国と日本は、昔、悲しい出来事がありました。その事を明確にした上で、これから次代を担う若者達が、二度とこのようなことが行われない様にいろいろな分野で交流を図り、仲良くすることが必要でしょう。」と言われました。短い言葉ではありますが、私達にとっては、とても重みのある言葉であり、団員も全員、これからの自分達の役目というものを再認識したようでありました。

また、中華青年連合会との懇談会では、連合会から日本へ、研修生を毎年数名送り出していることや、組織についての話が行われ、連合会の規模の大きさと日本の企業に対する関心度がとても高いことに驚かされました。



孫平化会長との会見

特に、勤労意欲が日本の青年よりも旺盛なことに、私達もショックを受けましたし、「日本の若者達はこれでいいのか。」といった話し合いも団員達と行われました。

その中で出てきた答えは、「あまりにも裕福な生活に馴れてしまっている日本の若者達に、どんなに中国の青年達が自国のために意欲的に働いているかを話してみても、とても理解してもらえないと思うので、今回のような親善使節団を多数派遣して、体験してもらうことが必要ではないか。」ということでした。

まさしく「心と心のふれあい」「体験して感じる」、これが国際交流の原点で

はないでしょうか。

南昌では、南昌市青年連合会、順外村の青年部、製茶工場やエンジン工場の青年達といろいろと話し合い、少ない時間ながらも、南昌の青年達の考え方を知ることができ、また、高松の青年のことも伝えることができたと思います。

また、交歓会では、和やかな雰囲気の中で、和気あいあいのうちに楽しくすばらしい交流が図れました。

今回、北京、南昌、上海で本当に多くの人達とふれあい、語り合っ、私達の感じたものは、全世界の人々が本当に協力し合っ、私達の地球というものを大切にし、「自分達だけ良ければ」といった言葉が聞こえなくなるような社会にしなければならないということでありました。



南昌市少年宮での熱烈歓迎

我々は8名でしたが、今後、数多くの若者が中国を訪問し、交流を深めることが非常に大切なことであると痛感するとともに、できれば小、中、高校生を早い機会に派遣することができればよいと感じました。

団員一同、今回の青年海外親善使節団として中国を訪問する機会が与えられたことに感謝するとともに、この経験をそれぞれの生活や仕事の中で生かし、21世紀にふさわしい国際人となるよう気持ちを新たに帰国いたしました。

最後に、今回の青年海外親善使節団の派遣を契機に、今後、日本人としての役目を理解する中で、ますます中国との交流が深まることを祈念するとともに、お世話になった多くの方々に心からお礼を申しあげまして、私の報告といたします。

親善使節団に参加して

— 中国で感じたこと —

宇都宮 善之

中国は、広い!!

これが北京に着いた時の私の第一印象です。飛行機の窓から外を眺めても、山がどこにあるか分からないのだから、日本とは較べられないくらいスケールが違うようです。

空港から市内のホテルへ向かう時も、どこまでも平らなまっすぐの道が続いていてびっくり。市内へ入ると道も広がり、片側3車線の6車線に。「すごいすごい。」と喜んでいたのですがよく見ると、外側の1車線は車道ではなく、歩道と自転車道が合わさったものだということが分かりました。その幅も、確実に「ライオン通り」より広いのだから、車道と見間違えても不思議ではないと



中華全国青年連合会を訪問

思います。あとで通訳の張利利さんに「通勤時には自転車があふれて幅が足りないくらいですよ。」と教えて頂いたので、「やっぱり中国は自転車の国なのかなあ。」と感心してしまいました。

市内を見学した時は、昔の建物がものすごく大きくて広いことに驚かされました。たとえば、天安門は、そのそばにある天安門広場が百万人収容できる大きさがあるというのに、その広場の反対側から写真を撮る場合、広角のレンズでないと門全体が入りきらないくらいに大きいのです。また故宮では、建物ひとつひとつが大きな上に、部屋の数が9,999室あるというのだから驚きです。

こんな建物が何か所もあるというのだから、昔の中国の人は、大きなものや、大きな数がほんとうに大好きだったようです。（そう言えば、中国名物?のパンダも大きな動物だし…）

郊外へ出ると、広々とした畑や果樹園が広がっていました。手入れも行き届いていて感心して見ていました。ただ、畑でも森でも、住宅地でもないような荒野

が、まだまだ残っており、「あれが農地になったら、日本でも食べ物が安くなるかも知れんな。」と思いましたが、そうなるまでには、あと数十年かかるかも知れません。これからどうなるか、楽しみです。

もうひとつ中国で印象に強く残ったのは「熱烈歓迎」という言葉です。とくに南昌市では、子供達から大人まで、市をあげて歓迎して頂きました。

南昌市の市長さんは、大陸的な風貌で威厳が感じられる中にも親しみやすい方で、「南昌では、田舎に帰ったつもりでのんびりして下さい。」とあいさつをされたものだから、本当にのんびりさせていただきました。



南昌の名勝、滕王閣

また、南昌で案内等の世話をして頂いた人々も、私の田舎のおばさん達によく似ていました。特に、李芸さんは、近くに住んでいるおばちゃんにそっくりで、「もしかして先まわりして中国に来とんやろか。」と思いましたが、中国語がペラペラなのを見て、「やっぱ違うみたいやな、よう似た人がおるもんや。」と感心してしまいました。

その方々は、私達が南昌にいる間、ずっと私達に付きっきりで世話をして下さい、言葉が通じない分、身ぶり手ぶりでいろいろと教えて頂きました。そこまでして頂けるのも、心から歓迎して下さいているからできることなのだと思います。日本人は、このような歓迎のやり方を忘れている人が多いのではないのでしょうか。

心からの歓迎、それが「熱烈歓迎」という言葉で表されていたのです。恩は恩で返さないといけません。中国の方が日本に来られるようなら、日本風に「熱烈歓迎」したいと思います。

心からの歓迎を。

青年たちの文化・思想について

川 畑 宏 之

私は、青年海外親善使節団の一員として、中国の青年たちとの交流を通して、彼らが何に関心を持ち、どういう考えを持っているのか、また、日本という国をどういうふうに見ているのかを知りたかった。

まず感じたことは、彼らが母国の発展のために、愛国心を持って努力しているということだった。四十年程前に日本と同じスタートラインでスタートしたにもかかわらず、なぜ現在の状況のようになってしまったのかを、真剣に考えているようだ。日本は資源がないため、アメリカとの協調関係を保ちつつ、危機感を持って復興していったが、中国では、その危機感に比較的乏しく、また、教育面においても、必ずしも全国一律の基準が解放後一貫して保たれたとは言えず、特に大学進学率があまり高くなかったこともあり、若い力が育ちにくかったのではないだろうか。このことが、発展していく上で、大きな妨げとなったようだ」と分析しているようだった。しかし、十年程前からの開放政策により、彼らの価値観は多様化し、世界に目を向け、視野の拡大を図っているようだ。潜在能力においては、勝っていると思われるだけに、何十年か後には、経済的にも逆転されるような気がする。



ハンサム四人組

文化の面においては、かなり伝統を重視しているようだ。私達が訪れた少年宮、南昌第二中学校でもそうだったが、書道、水墨画などは目を見張るものがあった。本当にみなさんお上手なのである。授業の時間数も日本とそんなに変わらないようなのに、この差は、どこから出てくるのだろうか。資質なのかもしれないが、やはりまわりの環境が大きな要因になっているのだろう。また、中国では国の方針により、漢字の画数を概ね十画以内にするという簡体字が採用されている。例えば、業が丒、電が电などはさほど問題ではないようだが、義が乂となってくると、全然意味が分からなくなってしまい、最近では中国でも危惧する向きがある

ようだ。

また、胡弓や舞踊も披露してもらったが、小さいころから教えているのだろう。日本では、伝統的な文化芸能を軽視する傾向が見られるので、もっと重んじていくべきだと思った。

生活レベルは、確かに日本より劣っているようだが、上海で訪問した居民住宅を見るかぎり、電化製品も揃っているようで、思っていた程の貧しさは感じなかった。

それ以上に、私達日本人の心の貧しさを痛感させられた。経済的には、世界に類を見ないほどの成長を遂げたかもしれないが、それ

によって生まれた競争社会の中で、本来あるべき姿、心の純粹さを失ってしまったように思う。中国の青年たちのふるまいや話を見聞してみると、彼らの大陸的で温かく、大らかな気持ちが良く伝わってきた。社会主義の平等の精神が、そういった気持ちを持たせるのだろう。日本は、経済的には発展したが、精神的には随分劣ってしまったように思った。

お互いに一長一短はあるようだが、共に成長していくために、行政レベルの話でなく、私たち個人個人の友情を基に交流を続けていくことが重要だと思う。

最後に、使節団の派遣にあたって、ご尽力頂いた森団長さんはじめ、事務局の井上係長ほか関係者の方々に深く感謝するとともに、この交流を通して得たものを糧として、今後の人生に役立てていきたいと思う。また、このような派遣とか、中国の方がお越しになる機会があれば、是非参加、協力をしていきたいと思う。



熱烈歓迎！

錆色の広野は温かかった

黒川寛子

「広い!!」

飛行機が着陸態勢に入った頃、窓からの景色はただ赤茶けた大地が広がるばかりだった。中華人民共和国が広い土地と多くの人口を持つ国であることは周知の事実であるが、どこを訪れても「広い、大きい。」の言葉がつい口を出してしまう。実体験してわかるその広大さに日本という国の狭小さを改めて感じさせられた。

この国に住む人々はどのような教育を受けているのだろうか？社会主義国の教育制度の特徴が何かあると予想していたのだが、見事に裏切られ、基本的なものは類似していた。例えば、科目、大学での多くの学部や専門科目、留学制度、姉妹校縁組制、招聘教師等。日本の現在の教育事情と比較して異なる点は、高校で1クラスが50名以上で構成されている、土曜日も午後の授業が行われている、伝統科目（書道など）がある（南昌二中）、大学内でスポーツ選手の養成のために小学生でも授業が受けられる（北京体育学院）こと等々である。



北京、天壇公園にて

また、人口の増加に学校の教室数が追いつかず、小学生が午前と午後の部に分かれて登校していたり（南昌市）、小学校を5年制にして、中学への予備年を設け、5、4、3、4制に移行する（上海市）など苦肉の策のような事情もある。日本よりまだ多い生徒を相手にどういう教え方をとっているのかまでは知り得なかったが、生徒・児童らの表情は明るく生き生きとしていた。受験戦争は隣国でもあるようだったが、違った雰囲気不思議でたまらない。

各地を訪問する折、スケールの大きい文化遺跡を見ることができた。万里の長城をはじめ、映画「ラストエンペラー」の舞台となった故宮博物院等々。そのすべてを目に入れるには数時間を要するものばかりだった。

日本のものと比較するには大きさが違いすぎるが、やはり類似点はあると思われた。例えば、建築様式は奈良時代～室町時代の日本の寺院建築にその様式が取

り入れられているものが少なくない。皇帝の墓は日本の古墳と同じように権力誇示のため莫大な財と民の労を費やしている。これらのものは歴史上考えられている中国→韓国→日本と流れる文化伝播の裏付けともなろう。韓国旅行の際もあった装飾品はやはり中国にもある。勾玉、首飾、腕輪、冠……。日本の博物館にも展示されているようなものを見つけた時は、

ついにはしゃぎたくなる。東洋だから似ていても不思議はないのだけれど…。南昌の博物館で見た美しい陶磁器はまるで有田焼や九谷焼のようで、「あーっ似てる。」と、指を立ててしまう程、素人の目にはそう映った。少し異なっている点は、色で何を表わすか決まっ



上海の子どもたちと

ていることと、日本は木の文化であるが、中国は石の文化ではないだろうかということである。機会があれば西安や南京、内陸のシルクロード沿いを是非とも訪れたい。

中国の人々は、その土地柄が悠久の歴史が育んだのかとても大らかである。人種としてはさほど変わらないからか親近感がある。質素な生活をし、勤勉で平等意識が高い。この姿勢を私たちは学ぶべきだと思う。特に男性が家事労働を無理なく行っていることには驚かされた。どの地でも私たちは歓迎され、温かいもてなしを受け、感激した。

隣国でありながら20世紀前半は正常な国交がなかった過去は消し去ることができない。しかし、中国の人々は内政不干渉でこれからの両国の行方を見つめている。私は訪中を機に、過去の戦いの真実をふまえて両国はもっと歩み寄り、交流を深めなければならないと思った。中国の人々と意見を直接交わす時に、語学力の無さが何ともはがゆかった。帰国後、中国の錆色の広野や姿が見えなくなるまで手を振っていた人たちが妙に懐しい。訪中親善使節団の一員として参加できたことは幸運に恵まれ一生の思い出の中でも意義深いものになった。

中国に、出会ったすべての人達に干杯!!

東 条 歩

ピーンと張りつめた冷たい空気と高い高い天井、ガラーンとした待合室、無表情な空港の人々の顔。これが中国に対して初めて抱いた私の感想でした。北京空港で荷物を待つ時間がとても長く感じられて、これからの9日間のことを思うと不安と孤独感でいっぱいでした。

けれども空港から一步出て、中日友好協会の張さんと李さんたちの暖かい笑顔に迎えられた時に、そんな気持ちはすべてふっとんでしまいました。そしてその笑顔を最初に、それから出会った中国の人々の「熱烈歓迎」の心からの暖かいもてなしには本当に感動し、一生忘れることのできない素晴らしい体験となりました。

3月30日から4月2日までの北京での滞在は、大国の首都としての威厳と、長い歴史の重厚さにただ圧倒されるのみでした。100万人が集合できる天安門広場の広さに驚き、封建時代の大国の皇帝の恐ろしいほど強大な権力を象徴する故宮や明の十三陵の威厳に息をのみ、島国である日本に住み慣れている私にとっては、あまりの大陸ぶりにこちらの気持ちまで大きく広く変わっていくようで不思議な体験となりました。



バンザイ!! (早朝の天安門広場にて)

そして憧れの万里の長城を一步一步登り、故毛沢東主席の「頂上に致らざれば高官にあらず。」の詩のかかげてある地点に立って回りを見渡した時には、中国という国の果てしない広大さに畏敬の念を抱くのみでした。

こういった素晴らしい歴史的な建造物から受けた感動と同じくらい強く深い感動を、出会った中国の様々な立場の人々から与えられました。中華青年連合会での会談、中日友好協会での孫平化会長との会見では、大変忙しいスケジュールの中から私たちのために貴重な時間を費していただいただけでも恐縮なのに、本当に気さくに本音で接していただき、逆にいろいろと気くばりをしてもらいました。

4月3日から5日までの訪問先、友好都市南昌市では、都会的で洗練された北京の歓迎とはまた違った、市をあげての熱烈で、ほんとうにあたたかい歓迎を受けました。

市長との会談に始まり、順外村、製茶工場、南昌二中、エンジン工場での交流会、様々な立場の人々との話は、時間を忘れさせ、いつも次の場所への移動の時には、

後ろ髪をひかれる思いがつきまわっていました。国や言葉の違いへのとまどいなど感じる間もなく、出迎えてくれた人々の心からの笑顔に自然と私も微笑んでいました。

さらに、4月4日の午後に訪問した少年宮では、交流会会場へ足を踏み入れた瞬間、子供達の歓声の声、声、声。感動のあまりに涙が出そうになるのを必死でこらえて席へつきまわりました。自分がこの席に座っている責任の重大さに恐ろしい思いを感じていました。



南昌、順外村の友人たちと共に

最後に訪れた上海は、国際都市として昔から栄えていただけに、外国人である私には一番なじみやすく、逆にいえば中国らしさを感じさせない雰囲気が漂っていると最初に思っていました。けれども高層ビル街の周りを少し散歩してみると、太極拳をする人々でにぎわっている公園とか、野菜市場などがあり、この街も、まぎれもなく世界最多の人口を誇る中国の人々の生活の場であることに気づきました。

ここで、居民住宅の訪問があり、その時に中国の住宅事情について少しふれることができました。2軒の平均的な家庭を見学させてもらったのですが、5人家族で2DKというのが普通だそうで、私にはかなり狭く感じられ、疑問を抱かずにはいられませんでした。日本のように小さい島国であるならまだしも、世界第3位の広さを誇る国土を持つ中国の住宅事情においてどうして、という点でした。

これは、都市部への人口集中と、経済力の未成長などが重要な問題点であるということでした。故宮や天安門広場の広大さとまさに対照的で大変印象に残るものでした。現代の中国においては、まず国全体の現代化が最優先であり、まだ個人の環境問題については考えられていないように思いました。

今回の中国訪問で得たことは語りつくせないほど多く、大きく、深いものとなりました。何よりも出会った中国の人々の生きる姿勢の素晴らしさにはただ、ただ、感動するのみでした。自分の国に誇りを持ち、自分の可能性を信じ、常に向上心を失わず、そして決してまわりに流されず……。今の私たち日本の若者が失いつつあるものを気づかされずにはいられませんでした。

そして「春風をもって人に接し、秋霜をもって自らを慎む。」この言葉のまま私たちに接してくれた彼らを、私の目標として一生忘れません。ただ一つ心残りなのは日本と、そして高松をじゅうぶんに伝えられなかったことです。これは今後の使節団の方にぜひお願いしたいものです。

中国に、そして出会った人すべてに干杯!! 再見。

青年海外親善使節団に参加して

中 村 有木子

北京空港から延びるポプラ並木、そしてそこを歩きかう自転車の波。私は、念願の中国の地に立っていることを改めて実感しました。近くて遠い国中国、その国のどのような姿を見ることができるのでしょうか。私は、心の高鳴りを抑えることで精一杯でした。また、青年海外親善使節団員としての役割を無事に果たすことができるかと一抹の不安も抱いていました。このような希望と不安を胸に、北京、南昌、上海の3都市を訪問した9日間は、有意義で心温まる日々でした。

第1に、私が感じた総体的中国について綴りたいと思います。私は、社会主義国をイメージするとダークグレーのカラーが浮びあがりました。日本に伝わってくるマスメディアからの社会主義国の情報は、自由の規制を大きく取りあげていました。それにより、自然に暗い国家イメージが形成されていました。

しかしながら、今回の訪中により私の偏った既成観念を改めざるを得ませんでした。ある程度の自由の束縛はあるにしても、人々の表情は生き生きとしており、品物も豊かに商店に並んでいました。青年に関してもファッションに敏感で、私の抱いていたイメージをことごとく覆しました。それらから、私は、中国をカラーで表わすと若葉のグリーンを連想するようになりました。



你好！中国

一般的に、中国は日本より約20年ほど遅れていると言われてはいますが、グリーンというカラーイメージから感じられるように、これからの10年後、20年後の中国がとても楽しみです。そして世界の大国としての地位を今以上高めていくことは歴然としています。日本において伝わる中国の情報を曇りのないレンズで正しくとらえ、中国に関する知識として蓄積していきたいと思います。

そして、地理的条件が、人々においても建築物においても大いに影響していることを痛感しました。万里の長城、故宮、天壇公園は雄大であり、また、飛行機が5時間遅れても私たちを待ってくれる中国の人々の寛大さには驚きました。

各国の国民性というものは、自然環境や生活習慣によって形成されます。そのため、国民性には相違が見られます。この度の9日間という期間は、中国の人々の国民性を十分に知るにはとても短く感じられました。私たち使節団は、青年との交流時間を沢山もつことができましたが、語学の問題と事前の知識の不足がネックとなりました。次回の使節団は、この点を反省項目として臨んでいただきたいと思っています。

第2に、私の訪中のテーマについて述べていきたいと思います。テーマは、「中国における福祉政策に関して」でした。中国の人口は、約11億人で、現在産児制限を行っていることは日本でも有名です。また人手が余って就労できない人もいます。それに伴って定年の早期化が窺えます。男性は60歳、女性は55歳（肉体労働者は50歳）です。日本では、まだまだ働き盛りで、人手不足という状況から再就職までして働いていますが、中国では、退職した人々は、趣味を深めたり、職業面での技術指導、交通指導などの社会奉仕、孫の養育などをして生活を送っています。身よりのない老人には、老人ホームが提供されています。老人ホームを見学することはできませんでしたが、設備面ではまだ十分ではないようです。



もう一度南昌に

また、中国では多くの女性が就労していますが、育児面では次のとおりです。育児休暇は、1年間あるそうです。そして、託児所、幼稚園などの施設がありません。北京、上海などの都会においては、地方出身の女性をベビーシッターとして雇っているケースも多いそうです。あるいは、前述しましたように定年退職した両親に育児を頼む場合も多く見られました。このような点において、定年の早期化のメリットが見られます。幼稚園では、日本の幼稚園と同じように音楽・美術・遊技で情緒や感性を高める方式で指導していました。

女性の就労に関して、特に気が付いた点は、男性の女性の就労に対する意識が、日本とは大きく異なっていることです。中国では、家事を夫婦が協力して行っています。その背景には、男女が平等で、お互いを尊重し合う精神が見られます。一方、日本では、表面的には男女平等を掲げていますが、内面的には、その意識は浸透していません。多くの男性にこの事実を知っていただきたいです。

このように、中国の福祉状況を垣間見て、人々の意識の土壌に助け合いと福祉精神が養われていることを感じました。ただ気になる点は、老人福祉に関してです。定年の早期化による老人の老化の顕著化です。私は、ここ10年間のうちに老人問題が中国においてクローズアップされると思っています。

最後になりましたが、青年海外親善使節団員として訪中できたことを心より感謝しております。私のようなものを選出してくださった国際交流協会の方々、楽しく和気あいあいと過ごさせていただいた団員の方々、9日間も快く休ませていただいた会社の方々にお礼の気持ちで一杯です。これからは、この経験を生かして、自己をより一層高めることができるよう励んでいきたいと思っています。

また、職場や地域における活動や国際交流事業に積極的に参加し、この経験を一時的なものではなく継続的なものにしていきたいと思っています。

今後ともよろしく願いいたします。

青年海外親善使節団に参加して

水 沢 阿由子

中華人民共和国。面積日本の26倍、人口約11億。実際にこの目で見て、肌で感じた中国は想像を超えていました。旅はその広大な国の首都北京から始まります。空港からホテルまでの間にいろいろなものに出会いました。重い荷物を引いている馬。東京の通勤電車にも負けないくらいいつも満員のトロリーバス。広い自転車道で軽快に自転車を操る人、人、人。雑然としているけれど、活気にあふれている露店市場。動くものすべてが一体になって流れている感じで、初めての異国での街の様子、交通事情に身を乗り出さずにはいられませんでした。また、短い日程の中に組み込まれた観光地は、壮大な歴史ドラマを想像させられるものばかりでした。特に万里の長城は人間技とは思えないすごさで迫って来ました。自らの足で踏みしめた城壁は2,500年前という気の遠くなる時に築かれたのです。大自然の中のちっぽけな人間、その小さな生き物が様々なものを作り出しているという事を改めて思い知らされました。

中国の環境、食事には日ごとに慣れて行きました。というのも、北京、南昌、上海で出迎えて下さった方々の暖かい歓迎と細かなお心遣いを頂いたおかげです。



万里の長城にて

北京では、中日友好協会の孫平化会長と会見する事ができ、その中でも特に日中戦争の事を「過去の事は過去の事として十分に認識した上で、前進していかなければならない。日本の教育の中では歴史上の事実をしっかりと後世に伝えていない」とご指摘を受けました。そしてこれから最も必要な事は、若者同志の交流なんだと、ざっくばらんにお話し下さいました。私達が今できる事は、日中関係を歴史の事をふくめて、しっかり理解し、後に伝えて行く様に努力しなければならないと思いを新たにしています。

また、高松市の友好都市南昌市では、通訳の方が少なくどうなる事かと思っておりましたが、カエル、小鳥の姿焼、江西省のお酒で50度以上の四特酒を飲みながらの楽しかった夕食会の事を思い浮かべると、言葉を越えて交流が出来たのではないかと思います。そしてその南昌でとうとう扉のないトイレに出会いました。郷に入れば郷に従えとはまさにこの事です。

とにかく、お会いした方々が偉大で親切で、その上陽気な方ばかりだったので、自分自身のふがいなさにかなりショックを受けています。北京から上海までずっと私達のお世話をして下さったとってもステキな張利利さんは、「自分自身には厳しい

のよ。何事もまず自分がやらないとだめ、子供はそういう姿を必ず見ているから。」と母親の一面もふくめ、さらりと言っておられました。他人に対して思いやりを持ちながらお仕事ができる。利利さんは女性の理想だと思います。また勉強家で何より国を愛し、家族を愛し、仕事に誇りを持っています。日本人の様に謙そんしたりせず、堂々としていて、決して高慢ではなく私達に紹介してくれるのです。これは少年宮の5歳の子供から出会った方々すべて…見習わなければならない事ばかりです。

さて、今回の私のテーマ、“女性の社会進出について”、これもまた驚くべき事ばかりでした。中国では、男女平等の考え方が統一



南昌、八大山人記念館にて

されています。理解されています。そのため、家族面でも夫婦共働きで子供は託児所に預けたりする事が普通です。そして家事労働も共働きなので、どちらか早く帰宅した方が食事の仕度をするといった具合です。なぜ、そうなのかというと、一面には、会社の中に、学校、託児所、病院などの施設が整っており、比較的女性が働きやすい環境にあるという事なのです。結婚して退職など全く頭中にない様です。日本では今、やれマドンナ旋風、やれ女性の地位向上などと騒がれていますが、これは残念な事に男女平等の考え方が、男女間でくい違っているという表れだと思うのです。封建的な日本の風調がまだ残っているのと、急激に発展し続けている日本社会との狭間で何か大切な忘れ物をして来たのではないかと思わずにはいられません。しかし、今からでも遅くないと思うのです。これからの日本の女性は、政治経済にももっと関心を持っていろんな疑問をぶつけて行かなければと思います。が、働きすぎの日本の男性社会の風調が変わらなければ、いつまでたっても本当の意味での男女平等の時代は来ないのではないかと思わずにはいられない複雑な心境です。ともかく“男女平等”の考え方が根本的に違う事が日本と中国の女性の社会進出の違いに大きく影響している様です。

この親善使節団に参加できた事は、おおげさではなく私の人生の中で必ずプラスになると思っています。普通の観光旅行では絶対得られないだご味を味わいました。中国の青年の方々との交流も時間が足りないほどでした。このような貴重な体験が出来たのも、現在までに日中友好のために努力されて来た方々のおかげだと改めて感謝しております。また高松市をはじめ、国際交流協会の皆様にも大変お世話になりました。本当にありがとうございました。

私にとっては宝物に値いするこの経験を生かして、高松の人間として、また日本人として国際交流のためにお役に立てる様に、日々努力をして参りたいと思っております。

最後になりましたが、森団長、高松市国際交流協会事務局井上係長、他団員のすばらしい皆さんとすばらしい体験が出来たことに改めてカンペイ！

中国を訪れて

事務局 井上 哲

大阪空港から約2時間30分のフライトで北京に到着。団員全員とも中国を訪れるのは初めての経験であり、事前研修などで多少中国語の勉強をしたもののほとんど話せない状況であったので、北京空港で異国の地に立った時は、少々不安でしたが、中日友好協会のみなさんが出迎えに来てくださっており、日本語を上手に話されるのを見て、日本にいるような安心感を覚えました。

特に、高松市役所研修生として、高松に滞在されていた張利利さんに約1年ぶりに再会でき、なつかしさとうれしさが一杯のうえ、使節団に最後までずっと同行していただけたということで、大変心強く感じました。

北京空港から北京中心部へは、広い道路が一直線に延々と走り、回りは見渡す限り広々とした平野で、遠くにわずかに山並みが見えるといった景色が続き、まざまざと中国の広大さを感じさせられました。



明の十三陵にて

北京は、格子状の道路で区画されている整然とした街並みの大都市でありましたが、2台連結したバスがぎゅうぎゅう詰めの満員で走り、道路の両サイドに設けられた自転車道に、数え切れないほどの自転車が走っている光景には、少なからず驚かされました。

中日友協の方々のお世話で、いろいろな史跡や施設の視察、孫平化会長との会見、青年との交流ができ、得られるものが多くありました。また、本場の中国料理は、中には刺激的なものもありましたが、興味をそそられながら、すばらしい味を味わうことができました。

第2の訪問都市である南昌市は、高松市と昨年友好都市提携したばかりの都市で、揚子江の南、上海から南西へ約826kmの内陸部にあり、飛行機で北京から約2時間、上海から約1時間半の所にあります。江西省の省都として、省の政治、経済、科学、文化の中心地であり、昔から、交通の要衝となっており、現在も道路、鉄道、航空の交通の結節点となっています。

南昌市は、人口363万人、面積7,400km²と都市の規模も大きく、空港のある郊外は広々と広がる田園地帯で、バスに揺られてその田園地帯を通り過ぎて街の中心部に入ると、楠やプラタナスの街路樹が植えられた広い道路が中央を走る町並

みの中に、予想をはるかに超える多くの人々の姿が、街中にあふれて、にぎわいの中に活気と明るさが感じられる雰囲気を感じておりました。

また、南昌市には、江南三大建築物の一つで唐の時代に建てられた滕王閣に代表されるように史跡・名勝も数多くあり、歴史の重みも感じられる都市でもありました。

南昌市と高松市が友好都市提携をして初めての市民レベルの親善使節団であったことから、その歓迎ぶりは大変なもので、人民政府、人民対外友好協会、青年連合会、また訪問した先々で、熱烈な歓待を受け、熱心な交流が行われました。



南昌市青年連合会を表敬訪問

特に、各所において、地元の青年達との交流の場が設けられ、日本と中国の生活や考え方などについて、少ない時間の中で、活発な意見交換が行われ、非常に有意義であったと感じました。今後、高松市と南昌市の交流では、こうした両市の青年達が率直な意見交換を行い、相互理解を深めることのできる機会を持てるようなプログラムを進めていくことが、特に重要であると認識しました。

南昌市での3泊4日は、両市の青年達の活力と熱気、そして何度も何度も行われる「干杯（カンペイ）」「干杯」の中で、あっという間に過ぎてしまいました。

最後の訪問都市である上海は、北京、南昌と違って、少し異国情緒が感じられる都市でしたが、ここでも人の多さにはびっくりさせられました。

上海では、市民の方の住居を訪問しましたが、上海は大変住宅事情が悪いということであり、訪れた家庭も、電化製品等は揃っていますが、非常に狭いところに3世代が住んでおり、日本と同じように、大都会では特に住宅問題が深刻なようでした。

また、幼稚園の訪問など、上海対外友協の皆さんのお世話で、訪中のしめくくりとして、思い出深く楽しい時間を過ごすことができました。

今回の中国訪問では、驚きと感嘆の場面が少なからずありましたが、東アジアの一国として共通点が多い印象を受け、非常に親近感を持つことができました。今後、南昌市をはじめ、中国との友好関係を発展させていくことは、非常に重要であると改めて感じさせられ、心残りながら、帰国の途につきました。

中国訪問中、大変お世話になりましたみなさま方に、深く感謝申し上げます。

○ 南昌市の記事等

□『南昌晩報』1991年4月5日記事

二中教師・生徒と高松市青年が友情を結ぶ

〔本紙記事〕 昨日午前、小雨の降る肌寒い中、南昌二中校内は「中日友好」という暖流に沸きかえった。日本の高松市青年友好使節団を迎え、同校の教師、生徒と歓談し、友情を温め合ったもの。

日本の高松市と南昌市は、友好都市の関係にある。去年、高松市の市制施行100周年記念式典に際し、南昌二中は国際児童絵画展に参加するため、12枚の絵画を同市に送った。今回、高松市青年友好使節団が本市を訪問し、南昌二中の教師、生徒の熱烈歓迎を受けた。同校校長鄭次甫が日本からの来客に、素晴らしい伝統と文化を有するこの学校を紹介し、同校の記章と十二支入りの印鑑を記念に贈った。日本の友人たちは、喜んで記章を身に付けた。中日両国の青年は、進学や就職、余暇、趣味など共通の関心事について、懇談した。笑いの溢れる和やかな雰囲気の中、二中側は「中日友好、世代相伝」、日本側は「中国が一番好き」とそれぞれ筆書きし、互いに贈呈した。

二中师生与日本高松市青年昨结友情

本报讯 昨天上午，细雨迷蒙，春意料峭，南昌二中校园内却涌动着一股“中日友好”的暖流，来自日本高松市青年使节团的团员和南昌二中的师生一起联席畅谈，交朋结友。

“日本高松市和南昌市是兄弟友好城市，去年高松市建市100周年庆典，

昌二中送去2幅画参加了在该市举行的国际儿童画展。这次高松市青年友好使节团访问我市，受到了南昌二中师生的热烈欢迎。校长郑次甫向日本客人介绍了这所有优良传统和丰富文化内涵的学校，并赠送了南昌二中的校徽和生员纪念，日本客人愉

快地把校徽别在身上。中日青年还就共同感兴趣的课题，如：求学、就业、业余爱好等等，作了交流与探讨。在一片欢歌笑语、轻松愉快的气氛中，二中师生挥笔写下了：“中日友好，世代相传”、日本青年写下了：“我最喜欢你”，互赠对方。（方芳 本报记者）

（方芳 本紙記者）

□『南昌晩報』1991年4月6日記事

高松市青年海外友好使節団 昨日南昌を離れる

〔本紙記事〕 昨日午後、高松市青年海外友好使節団一行8人は、南昌市民の友情を胸の内に南昌を離れ上海に向かった。この団は、南昌市と高松市が友好都市提携を結んで以来、南昌を訪問した初めての日本の代表団である。4月3日、市幹部蔣仲平、徐月良が一行と会見し招宴を行った。

高松市青年海外友好使節団は、中国日本友好協会の招きによるもので、北京を経て南昌を友好訪問していた。

南昌滞在中、一行は滕王閣、八一起義記念館、順外村等を見学したほか、南昌市各界の青年と、職業選択観や女性の地位などの問題について懇談した。中日青少年交流会の席上、友好使節団団長の森茂幸氏が、「愛は勝つ」と筆でしたため、南昌市人民に対する友情を表現した。

（万 明勇）

本报讯 昨天下午，高松市青年海外友好使节团一行8人满载南昌市民的深情厚谊乘飞机离开南昌前往上海。这是南昌市和高松市缔结友好城市后，首次访问南昌的日本代表团。4月3日，市领导蒋仲平、徐月良接见并宴请了友好使节团的全体成员。

高松市青年海外使节

高松市青年海外友好使节团昨天离昌

团是应全国友协的邀请，经北京来南昌进行友好访问的。

访问期间，日本朋友参观游览了滕王阁、八一起义纪念馆、顺外村等，并与南昌市各界青年就青年择业观、妇女地位等问题进行了座谈。在中日青少年交流会上，友好使节团团团长森茂幸先生高兴地题词：“爱就是胜利”，表达了对南昌市人民的友好之情。（万明勇）

□『南昌青連』1991年4月号記事

(南昌市青年連合会機関誌)

友情の虹を架けて

万 里 濤

4月初め、初春の冷たい雨の降る季節にもかかわらず、ここ数日は晴天が続いていた。暖かい春風の中、日本高松市青年海外友好使節団一行8人が、4月2日空路南昌に到着し、4日間の友好訪問を開始した。

南昌市と高松市は昨年、友好都市提携を結んだが、この前後、両市政府代表団が相互訪問を行い、両市の各方面での協力と交流の基礎を築いていた。今回、日本高松市は、両市青年の友好交流と相互理解を深めるとともに、中日両国の青年の友好往来の発展を促進するため、高松青年会議所理事長森茂幸氏を団長とする青年海外友好使節団を初めて南昌に派遣したものである。南昌では、市政府の熱烈な歓迎と市青年連合会のもてなしを受けた。

4月3日午前、南昌市長蔣仲平と共産党市委員会宣伝部長徐月良、市政府秘書長査俊如らが使節団一行と会見した。蔣市長は、南昌市人民政府を代表して、日本の青年たちの来訪に歓迎の意を表するとともに、この訪問が両市の交流と協力、発展に寄与することを希望した。高松市青年友好使節団団長の森茂幸氏が、高松市長からの挨拶を伝え、蔣市長宛の直筆の親書を手渡した。会見に同席していたのは、市政府外事弁公室主任李芸と、市青年連合会主席呉治云、同秘書長漆永亮らである。会見は、心置きない友好的な雰囲気のもと、とり行われた。

引き続き、使節団一行は青年連合会主席呉治云らの案内で、南昌市内の名勝古跡を観光し、南昌市の各界青年代表たちとの座談、交流を行った。

贛江のほとりにそびえる滕王閣で、遊覧ガイドの娘たちが日本の友人に滕王閣にまつわる歴史変遷や歴史的人物の故事などを丁寧に説明した。建物内部の古代を復元した舞台では、友人たちは、『漁舟唱晚』と『春江花月夜』などの中国古典の名曲、歌舞を心ゆくまで鑑賞した。日本の青年たちは、滕王閣の雄大、壮観なさまと内部の精巧なつくり后感嘆の声をあげ、この名楼を盛んにカメラに収めていた。

明末の皇太子孫朱奪は、明朝廷の凋落と満州族清の統治に憤懣やるかたなく、南昌市郊外の青伝譜に隠遁した。号を八大山人といい、数十年の苦労を経て、中国写意画の一派を初めてうちたてた人物である。青年たちは、八大山人記念館を訪れたが、まずその静かな淡泊なたたずまいに中国道家の建築様式を感じとった。書画の陳列室に入ったところ、八大山人の優れた書画技術、すなわち中国の大筆による写意画の自然な筆使いとその表現の奥深さに目をみはり、賞賛の声がやまなかった。

やはり市青年連合会の呉治云主席の案内で、日本の友人たちは、南昌市の製茶

開発会社を訪れた。まさに春らしく、この時、春雨がふりだした。会社内に漂う茶の香りが人々の心に沁み入り、まるで茶の林に足を踏み入れたようだった。友人たちは茶道を好んでおり、静かに降る春雨の中、かぐわしい茶の香りに興味をそそられ、いそいそと茶の生産ラインに向かった。この会社の主人は客をもてなすのが上手であった。友あり遠方より来るとばかりに友人たちに茶を一杯ごちそうし、また土産を差し上げた。友人たちは、茶を賞味しながら主人の説明に耳を傾けていたが、中国の茶文化の有する悠久の歴史と深い味わいがまさにこの一杯の茶に凝縮されていることを感じていた。茶を堪能したところで、友人の一人が、「茶香飄万里」と一筆したため、茶への思いを墨に託した。

4月4日午後、日本高松市青年海外友好使節団は、市少年宮にて南昌市青年連合会を訪問した。市青連代表として会見に参加したのは、次のとおり；市青連主席呉治云、副主席鄒国容、秘書長漆永亮、常務委員涂鶴齡、市青年書道美術協会会長長曲涛、余貴森ほか。呉主席は、あいさつの中で、日本の青年たちの来訪に歓迎の意を表し、南昌市・高松市両市の青年の友好交流が尚一層盛んになることを希望した。高松市青年友好使節団団長の森茂幸氏がお礼のあいさつを述べた。続いて、双方の青年たちが恋愛や就職など共通の関心事について座談した。本市の青年代表は、日本の青年の教育、仕事、生活などの状況を詳しく尋ねた。ある青年は、日本の若い女性の社会や家庭での地位に興味を示していたが、女性団員がそれらに一つ一つ答えていた。日本の青年たちは、両国の女性が社会、家庭で果たす同じ役割に理解を示した。この後、市青連が友人たちに南昌名産の「文崗毛筆」と書道作品などの記念品を贈呈した。日本側からは、高松市の工芸品である「獅頭」が贈呈され、その際、市青連のますますの発展を祈る旨のあいさつがあった。森茂幸氏が、自分の一番好きな言葉の「愛は勝つ」を筆でしたため、市青連への記念品とした。市青連の訪問が終了後、友人たちは、少年宮主任姜紅から少年宮の発展状況について説明を受け、また少年宮の子供たちの楽器演奏、歌舞、曲芸や書道作品などを鑑賞した。子供たちの素晴らしい演技に友人たちは拍手喝采を浴びせた。

友人たちのための晩餐会で、両市の青年は何度となく杯を合わせ、友情が永遠に続くことを願った。席上、友人たちは優美で感動的な日本の歌を合唱し、自らの愉快的な気持ちと主人に対する感謝の心を表現した。アナウンサー水沢阿由子さんは、「南昌での思い出はいつまでも忘れることがないでしょう。」と興奮気味に語ってくれた。市青連常務委員の涂鶴齡も感情を込めて京劇の一節を高らかに歌った。また、漆永亮秘書長も「友誼地久天長」という歌を披露し、宴席を盛り上げた。

飛行機が轟音をあげて紺碧の空に飛び立った。

別れ難き日本の友人たちを乗せて

南昌市青年の友情を乗せて

南昌と高松の間に架けられた友誼という一本の虹を通して

Ⅱ 姉妹都市親善留学生の報告

○ 姉妹都市親善留学生名簿

留学先	氏名	性別	年齢	住所	勤務先
セント・ピーターズバーグ市	キク チ ミユキ 菊 池 美由紀	女	25	高松市香西北町 259-12	(株)ビーライン
トゥール市	カサ イ サトミ 笠 居 佐都美	女	27	高松市多賀町三丁目 7-13	オリエンタルモーター(株) 高松事業所



菊 池 美由紀



笠 居 佐都美

○セント・ピーターズバーグ市親善留学

・ 日 程

月日(曜)	地 名	現地時間	交通機関	日 程
3月27日 (水)	大阪空港発 ロサンゼルス着 ロサンゼルス発 タンパ空港着 セント・ピーターズバーグ着	16:30 9:45 11:55 19:19	NW26 US151	キャシー・プランタムラさんの出迎え キャシーさん宅にホームステイ
3月30日 (土)	セント・ピーターズバーグ			ルイスさん宅でホームステイ 開始
4月1日 (月)	〃			ELSセント・ピーターズバーグ校の学 期開始(1セッション目)
4月26日 (金)	〃			学期終了
4月29日 (月)	〃			学期開始 (2セッション目)
5月24日 (金)	〃			学期終了
5月27日 (月)	〃			学期開始 (3セッション目)
6月21日 (金)	〃			学期終了
6月24日 (月)	セント・ピーターズバーグ発 タンパ発 ロサンゼルス着 ロサンゼルス発	8:45 11:10 12:15	US144 NW25	ホームステイ終了
6月25日 (火)	大阪着	16:10		

・活動の概要

○ホームステイ先

ミセス ルイスさん宅（到着後の3日間はキャシー・プランタムラさん宅）

○語学研修先

E L S セント・ピーターズバーグ校

＜クラスメート：16人（うち日本人6人）＞

※E L Sは、英語を専門に教えるランゲージセンターで、セント・ピーターズバーグ校は、セント・ピーターズバーグ市のエッカード大学の構内にある。

○語学研修

・第1セッション目（4月 1日～4月26日）

・第2セッション目（4月29日～5月24日）

・第3セッション目（5月27日～6月21日）

※セッション期間中にE L Sが実施する各種の催しに参加し、いろいろな国の人と交流を深めた。

○表敬訪問

・セント・ピーターズバーグ市 フィッシャー市長
ロウエル国際交流担当

・E L S セント・ピーターズバーグ校 プライス校長

○市民交流（主なもの）

・セント・ピーターズバーグ地域の日米親善を図っているフライデー友の会に常時参加し、友の会の人達と親密に交流

・セント・ピーターズバーグ市国際交流委員会にあいさつのため出席

・在米フィンランド人の会のピクニックに参加（ミセス ルイスがフィンランド生まれ）

・ホームステイ先の近所の人達とキャンプに参加

・ホームステイファミリーの高校生の卒業式に参加

・7月に高松市への短期留学生（高校生）として派遣されるコーヘンさんと食事をしながら歓談

・高松市役所の留学生南さんと連絡を取り合って、セント・ピーターズバーグ市で開催されたいろいろな催しに参加

・セント・ピーターズバーグ市内のナーシングホーム（老人ホーム）を視察見学

○招待等により訪問した家庭

・カンプトン夫妻宅（友好太鼓演奏者）

・ルイスさんの親類や友人宅

・アドキンスさん宅（日本への留学経験者） など

アメリカに行って

菊池 美由紀

高松市の姉妹都市セント・ピーターズバーグ市へ3か月間留学し、ホームステイをしながら、エッカード大学の構内にある英語の語学センターELSセント・ピーターズバーグ校へ通い、英語を勉強するかたわら世界各国から来ているクラスメートたちと交流し、コミュニケーションを取り合うことができた。

また、セント・ピーターズバーグ市の多くの市民の方と知り合う機会にめぐまれ、日米親善活動を行っているフライデー友の会のみなさんや、ホームステイファミリーのみなさんなどと思い出に残る交流が図れた。

この3か月間、アメリカへ行っていろいろな経験をしたが、その間に、私が感じたことを書いてみます。

アメリカに着いて一週間くらいたつと、私は妙な感慨を持つようになっていた。それは、日本で感じていたとおりのアメリカだということである。だから、肉料理ばかりだったり、徹底した個人主義や自己主張などをされても別に違和感を感じなかった。むしろ、そんな中で平気な自分に驚いていた。私だけがそんな風であったかというところではなく、ほとんどの日本人学生たちがすぐにアメリカの生活になじんでいたのである。



カンプトンさん宅にて

「明治は遠くなりけり」ではないが、日々アメリカからの情報が入り、もはやアメリカナイズという言葉以上に日本はアメリカと接近しているようにさえ感じた。そしてその傾向は、日本ばかりでなく、ブラジル、スイス、スペイン…全世界に広がっており、経済的には弱くなりつつあるアメリカであるが、世界の中心であることに変わりないということを改めて認識させられた。

学校で、テレビで、NASAで、ディズニーワールドでいつもアメリカは語りかける。この国は、夢を可能にできると。私を含めて多くの学生たちが、その雰囲気の中で、解放感と自立心を養っていたように思えてならない。この外から人を呼びこむ力こそアメリカの底力だといえないだろうか。

もちろん、一方で一抹の危惧を覚えないこともない。様々の国から来たすべての人が英語を勉強しているからという理由も考えられるが、みんながマドンナやマイケル・ジャクソン、トム・クルーズが好きで、ハンバーガーを食べるとするのは何だか怖い。地球上の価値感ソビエトのペレストロイカも手伝って、資本

主義というベースの上で一方向に向って傾むきつつあるように思えてくるからだ。人間が、この狭くなりつつある地球で一つの価値に向って走りだしたらどうなることか？

私はアメリカで韓国から来た女の子と友達になった。彼女はいう、「私達の国では、日本の観光客や受験制度を批判していたのにもかかわらず、今は日本の様な社会になりつつある。」と。資本主義なのだから、お金は大切で必要だけれども、それによる人間自身に対する疎外感をそろそろ世界が考える時が近づいてきている様に思えてならない。



ビーチでのピクニック

そうした不安の中に希望も見えてくる。クラスの討論の時間に、「NASAの宇宙開発について天文学的な費用が必要だがそれでも開発は行うべきか？」というものがあつた。そして、私達は全員で「未来の子供達に必要なに違いないから、行うべきだ。」という結論を持った。もちろん討論は討論だから、現実の問題点が挙げられることによって意見は変わってくると思う。しかし、それでもその時、自分は構わないと口にできたことはすばらしい。

アメリカには様々な国の人が集まる。最初はとまどつたが、人間としての根本は同じだとNASAの話を通して実感できた。ただその方法論が微妙に異なっている。だから恐ろしいし(すれちがいが一番怖いと思いませんか?)、だからおもしろい。アメリカの人達も少しだが、オリエンタルの考え方に興味を持ち始めているようだ。ホームファミリーのメリィが、「オリエンタルの人は本当によく働く。それにとてもスイートだ。シャイな人が多いみたいだけど、時にはシャイな人もいいと思える様になった。」と言ってくれた。競争の激しすぎる社会にならないためには、そんなメリィの姿勢がみんなに広がるとよいと思う。

私の周囲は日本人好きの人が多く、ずいぶん甘やかされた留学だったが、今後も、各国の友人を大切にしてお互いを高めて行けたら幸福だと思っている。私のできる事をしたいと、あの国から帰っていつも考えるようになれた。本当によい経験をありがとうございました。

○トゥール市親善留学

・ 日 程

月日(曜)	地 名	現地時間	交通機関	日 程
3月30日 (土)	大阪発 成田空港着 成田空港発 パリ着 パリ発 トゥール着	9:55 11:00 12:30 17:15 19:32 21:46	JAL152 JAL405 在 来 線	クレオラ・ミキさんの出迎え ミキさん宅にホームステイ
4月2日 (火)	トゥール			レイエルさん宅でホームステイ 開始
4月3日 (水)	〃			トゥーレーヌ語学学院(アンスティテュー ト・ドゥ・トゥーレーヌ)の学期開始
6月21日 (金)	〃			学期終了
6月22日 (土)	トゥール発 パリ着 パリ発	22:10	T G V JAL406	ホームステイ終了
6月23日 (日)	成田着 成田発 大阪着	14:55 17:30 18:40	JAL 51	

・ 活動の概要

○ホームステイ先

マダム レイエルさん宅(到着後の3日間はクレオラ・ミキさん宅)

○語学研修先

トゥーレーヌ語学学院(アンスティテュート・ドゥ・トゥーレーヌ)

<クラス> 先生:マダム フォーテン

生徒:10か国 15人

※トゥール市内にあるフランス語の語学学院で、初級から専門家までの教育に適したバラエティに富むカリキュラムを持ち、毎年3千人の外国人を受け入れている。

○語学研修

- ・学期 4月3日～6月21日（トゥーレーヌ語学学院の第3学期を受講）

○表敬訪問

- ・トゥール市 バイヨー助役
ベルニュー国際交流担当
※バイヨー助役の計らいにより、後日、グランドシアターのダンス発表会、美術館見学、オーケストラ演奏会に行く
- ・トゥーレーヌ語学学院 ゴルギュ校長

○市民交流（主なもの）

- ・トゥーレーヌ仏日協会主催のトゥーレーヌ甲南学園歓迎レセプションに出席し、テュルパン会長をはじめ、仏日協会などの人達と交流
※トゥーレーヌ甲南学園は、地元の中学校の協力を受け、神戸甲南学園がトゥーレーヌ校（高等部、中等部）を新しく4月に開校
- ・トゥール高等商業学校の国際交流パーティーに出席
- ・トゥーレーヌ語学学院の外国人留学生とフランス人家庭との交流会に出席
- ・昨年高松に滞在していたコロボさんの日本のスライド映写会に参加
- ・クレオラ・ミキさんの日本語講座を見学
- ・トゥーレーヌ仏日協会主催のトゥーレーヌ語学学院の日本人学生を招待した交流レセプションに出席
- ・トゥール大学工学研究課程の見学とレセプションに出席
- ・トゥール市の前国際交流担当のエスナルさんの展覧会を見学し、友人の人達と交流
- ・トゥーレーヌ甲南学園が実施した学生のホームステイを受け入れ中のジュイユさん宅を訪問
- ・トゥーレーヌ仏日協会主催の日本武道のデモンストレーションに参加、メインイベントはトゥーレーヌ甲南学園の猪熊校長先生らによる柔道のデモンストレーション

○招待等により訪問した家庭

- ・テュルパン仏日協会会長宅
- ・ジュイユさん宅（高松の中学生親善使節団のホームステイ受け入れ家庭）
- ・バレルさん宅（夫人が日本人、3月に来高し市長を表敬訪問）
- ・マテールさん宅（仏日協会会員）
- ・サブランさん宅（元エールフランス日本支配人で5年の在日経験者）
- ・レモン洋子さん宅（トゥール高等商業学校の日本語講師）など

トゥールの思い出

笠 居 佐都美

フランスにあこがれ、長い間フランス語を学び、そして叶ったフランス留学でした。留学地は、高松市の姉妹都市であるトゥール市。パリからTGVでわずか1時間、中世以降宮廷文化の栄えた地方。ワクワクしながら、トゥールへ発ちました。

トゥール市の中心地には、Vieux Toursと呼ばれる古い町並みが残っています。それが実にいい雰囲気です。よく足を運びました。地震がフランスにはほとんどないため、石で建てられた建物が長く残っています。そして、食べ物の市、花市、アンティーク市が毎週2回開かれ、いつも賑わっています。古くからの習慣やものがたくさん残っているように思います。



遠足でクラスメートと

3ヶ月通ったINSTITUTE DE TOUR-AINE (トゥーレーヌ語学学院)は、100年以上の歴史を持つ外国人がフランス語を学ぶための学校です。そのため、古くから外国人が多く住み、外国人のホームステイを受け入れている家庭も多く、町の人達もどうやって外国人に接すればよいかということを知っているようです。本当に外国人に優しい町でした。たとえば、銀行に外国人専用の窓口があったり、お店で店員さんの言っていることが理解できないときには何度もゆっくり繰り返しくれました。Accueil (外国人との交流会)をすれば会場に入りきれないくらいの人が集まり、市民の力で、トゥーレーヌ仏日協会が運営され、学生たちは、もっといろいろな国の人達と知り合いになりたいとInternational soiree (国際パーティー)を企画します。一人ひとりが外国に関心をもち、外国人を受け入れているように思いました。国際性という点では、トゥールは感動の多い町でした。

日本語を学んでいる人達、日本に興味を持っている人達と知り合いになることができました。言葉は十分ではありませんが、辞書を片手に何とかコミュニケー

ジョンを取り合うことができました。日本の話に耳を傾け、フランスの習慣を教えてくださいました。その家にとっておきのワインと日本では珍しい食べ物をごちそうになりました。中には、何度も、お宅に招待してくださる方もいて、幸せ過ぎるくらいでした。

フランスといえば、パリのようにファッションと芸術のきらびやかなイメージを持たれがちですが、田園風景の中の広い家で、家庭料理とおしゃべりで過ごす時間がフランスらしいと思います。そういう習慣が大好きです。日本で田園風景の広い家となるとひじょうに難しいですが、フランスで私が受けたように、



サブランさん一家と散歩

いつの日か自分の家で、大事な人達を自分の料理でもてなしたいと思っています。

町には、日本の製品があふれ、同じ地方で甲南学園が開校し、また日本企業が進出を決め、フランス人の日本への関心も高まってきています。5月に誕生したクレソン首相が反日派ということもあり、毎日のように新聞やテレビで日本についての報道があります。そういうものを見るにつけ、日本の国際的に置かれた立場を考えさせられます。そして、日本によせる期待の大きさを感じます。国際社会で日本はお金だけを出していたらいいという風潮がありますが、経済面だけでなく、人間のふれあいの面でも貢献できる日本でありたいと思います。

この3ヶ月で、数えきれない方々と出会い、数えきれないくらいの親切を受け、素敵な思い出でいっぱいです。ツールを発つときも、ホームステイ先のマダムをはじめ、知り合ったフランス人家族の方々は私を娘のように抱き締めてくれました。クラスメートも何年も一緒だったかのように送ってくれました。人との交流がこんなに素晴らしいということを改めて感じています。そしてこれで私の国際交流が終わったのではなく、これから始まるのだと思います。ツールで知り合った人達との友情を続けていくと同時に、高松を訪れる外国人の方々の思い出づくりのお手伝いができたらと思っています。

